

生涯学習と書文化 (一)

——国語教育専修科目を通して

新潟大学教育人間科学部

岡村 浩

一 はじめに

大学改革に伴い「特別教科書道教員養成課程」から「芸術環境創造課程 書表現コース」と名称・カリキュラム等が全面的に変わった。

自発的な改革を要する面と、応じて変革を行った面とがある。ともあれ、はっきりとした判りやすい理念の貫通が不可欠である。

担当講義の特色は、「芸術」「書」と冠せられた課程名・コース名が物語っている。

別に、従来国語科講義として「書道講義および実習Ⅰ・Ⅱ」を担当。こちらの方は改組後名称が殆ど変わらなかった珍しい例である。但し通年二単位だったものが半期二単位となった。前期でⅠ、後期でⅡを履修する学生が多いため、カリキュラムは通年開講していた頃と余り変えていないのが実状である。

この頃、書の一般でのあり方に思いを寄せている。本考では学校教育課程に位置付けられたカリキュラムを通し、実践例とそれに対する学生世代の反応に言及することが主だが、学校教育以外における書文化の生き残りを実際のところ、深く考えなければならぬ局面を、書表現コース構成員として迫られている。

「書道講義および実習Ⅰ・Ⅱ」は書表現コース学生ではない様々な専攻学生を対象とする。日頃書を専門としない学生がどのように

「書」を見ているのか、この点を察する上で授業者自身、非常に興味深く講義を行ってきた。

書と社会との融合という命題を考えるために、機会があれば社会人向け成人大学講座等県内市町村が主催する講師を担当している。最終的にはこの内容につき詳細な分析を試みるつもりなのだが、それに魁て、「書道講義および実習Ⅰ・Ⅱ」の授業について、現在のところの学習・履修成果の一部に関し発表することとする。これに続き、社会人向けの講習事例等を視野に入れながら、考察を加えていくことにする。

二 「書道講義および実習Ⅰ・Ⅱ」のカリキュラム・指導内容について

通年の内容を以下、順次示す。

へ「書」とは」 第1週

○「書」の文字の意味

○ 楽しさ・難しさ・達成感・表現するよろこび・特殊性・用具の説明。

○ 講義と実技とを織りまぜて行うことの説明。

○ 評価のポイント・授業のねらいの説明。

○ 実用として、芸術として書はある。

○ 国語科教育の中での位置付け。

○ 上手下手・巧拙でなくどれ位手書文化に興味を抱くか、前向きに取り組めるか、を重視。

単位取得の目的としてではなく、社会人として一般教養・常識として手紙の書式等必要とされる関連文化を身につけ実践することこそ最も望まれる。

実技

2・3週

へきれいな書・誰がみても美しいと思う表現の学習

○きれいに、上手にみせるコツをおさえる。

○形

○線

○配字

○筆運び

○小・中学校教科書より二字・四字課題を抽出し配布、練習する。

実技

4週

手本に沿った基本的要素を学習後、応用として自分の名前を半紙に大きく収める。

基本事項の確認

起(始)筆・送筆・終(収)筆・横画・縦画・転折・右ばらい・左ばらい・はね・短い線・小さな点・各箇所の確認と若干の専門用語の説明。余裕があれば少しずつ用語を覚えてもらう。

ポイント

前回は手本(参考とするもの)があつたが今回初めて手本がない。不安感に対して自信を持つて書くこと、自分の名前署名は自分の顔であり、巧拙は二の次として自分らしく書くことと、何よりも丁寧に書くことが重要である。

日常生活において、署名の機会は枚挙に暇がないが、どんなときでもせめて自分の名前位は丁寧に書く習慣を意識させたい。

また、文字には意味がある。数人に命名の由来を聞いてみる。名前の大切さを改めて考えてみるとともに、次回は文字の持つ今日的な学習すべき内容につき触れる。

講義

5・6週

へ文字に関する知識 その一

○文字に関する一般教養。

○漢字・ひらがな・カタカナ。

○新・旧字・異体字。

○文字が出来るまでの変遷。

○楷・行・草・篆・隷書体の成り立ちと特徴。

講義

7週

へ文字に関する知識 その二

○書順(筆順)

○部首名

○特殊な音訓読み。

○同音異義語の書きわけ。

○指名して黒板に解答を書かせる。

○「わかりません」で終わらないようにヒントを与えながら考えてもらう。

○課題をプリントして配布。

すべてを暗記するために行うのではなく、日頃何気なく使用している文字表記に関する一般教養として、たくさんの内容が含まれていることに改めて気付かせることをねらいとする。

これらを知らなければ生活に支障をきたすわけではない。しかし文字文化の中で今後も次代に伝えたい重要なことがらである。

将来、人前で話し書くことが比較的多いと予想される学生達だからこそ、これを機に意識をしてほしい。

実技

8週

へテーマ 感情移入 素材感

個性の発露たる書のあり方。

形をきれいに上手に見せるために書くだけでなく、例えば生まれもった性格や手すじ——「個」の力をいかに楽しみながら書の上に各人の持味を発揮するかといった内容も、書の世界にあることを知っ

てもらう。

段階一

横画（横棒）の練習

まず普通に書く。一本のみ引き、それを少し鑑賞する。周囲の作と自作を比較する。

線の太細・潤濁・長短・揮毫の位置・起（始）筆の角度等を鑑賞のポイントとする。

一本の線だけであるがそこには様々な変化・味わいがある。「書は人なり」と言い古された感がある言辭が知られるが、自然に書いた横棒一つにしても、個人の特色の一端が表出している。

段階二

最大限可能な太い横画の表現

〃 細い横画の表現を一本ずつ引く。

○どんな工夫をし、何を意識したか問う。

○筆圧（タッチ）・墨量・運筆の遅速がどうであったか。

○それらによって、同じ人が同じ筆で書いてもこんなに異なる表現が誕生することに気付く。

○表現の幅や思考を拓げ、狭い常識的な思いを払拭する。

○現場の、多彩な児童生徒の作を見て、瞬時に良い点や改善点を見出し指摘する力が、何れ実践の中で必要とされることを知らせる。

段階三

素材感・感情移入の実践体験

○指導者の作家としてのコメント―いつどこで如何なるサイズで、何の目標で作品発表をするかということ、制作意図は変化する。

○加えて書の文学性―どんな言葉・語句を素材として用いるか。

○新潟大学は海の近い大学。日頃慣れ親しんだ、或いは何気なく見過ごしている「海」の存在をテーマとしてみる。

海に対し抱くイメージを鉛筆等で作文する。

○指導者の四季それぞれの感じ方、数人のコメントを聞く。考える幅を拓げる。

○本時の最大の学習目標―個のイメージを筆で表現することの確認。課題に入る

○穏やかな海。

○夏の海。

○冬の海。

右の三風景を意識した「海」字を順番に一枚だけ書く。自分の気持ちを表現することが第一だが、以前取り組んだ線質・タッチ・字の大小・配字・墨の濃淡等書を構成する基本的要素の存在を確認しながら揮毫する。一課題終わるごとに数人の制作例を示し、鑑賞・考える時間を設ける。

○一枚しか書かないということ―初発の感動の重要性。

第二の課題 最初に作文した内容に沿った各人なりの「海」を素材とする内容に基く制作に取り組む。

○初発の感動プラス錬度を意識し、三枚書く。

○作文とともに提出。

○次の時間の最初に提出物の鑑賞の時間を作ることの予告。

実技

9・10週

へテーマ 素材感・感情移入学習の発展を含む生活の中での筆文字（手書文字）を身近に考える。〃

○新潟祭りのポスターを作る。

○街中に季節感を漂わせたポスターを多く目にする頃、自分だったらどのようなものを作るか。

段階一

○「新潟祭り」の四字を半紙に書く。

○教育上基本に忠実な書き方から始める。

○書順・部首名等の確認。

○次いで前時の学習内容を想起しながら、自分のイメージを盛り込んだ制作を行う。

○半紙は縦横自由。

○終了時、前に作品を集めて鑑賞・互評を行う。

段階二

○「新潟祭り」の四字を入れたポスターを作る。

○デザイン・絵画的なものでもよい。

水彩画用具を使ってもよい（前時に予告済）。オリジナリティ・手作りの良さを味わう。最後に提出物の鑑賞を行う。

実技

11・12週

△テーマ 生活の中の筆文字を身近に考える。▽

書道科では芸術活動として美術博物館で展覧会を開催する。書展作品に対して一方、一般生活空間における実用的な目的により筆を使用することがある。これら実用書と、一般家屋における鑑賞芸術たる書の認識を行う。

用例の挙示

○熨斗袋

○芳名録

○表札

○賞状

○手紙（年賀状・暑中見舞状・ハガキ・封書・巻紙）

○色紙

○短冊

右の実例を見せながら特徴を簡述。

段階一

熨斗袋（紙）の書き方・用い方

○慶弔の別について

○参考例を配布して「寸志」「御祝」「御礼」等を揮毫練習する。

○予め用意した熨斗袋に実際に書いてみる。

○緊張感・立体間のある用紙の難しさ。

段階二

暑中見舞ハガキを書く。

○小筆の使用法。

○小筆で自分の住所・氏名を書く。

○手紙の書式について講義を行う。

○配字・字の大小。

○巧拙より丁寧さの如何を大切にす。

○将来、面倒がらずに積極的に挑戦することを期待。

○実践を積む中で自分の普段着の手書文字が出来上がっていくことの説明。

用意したハガキを使用しての揮毫

○本文は指導者が口頭で読み上げ、それをハガキに収める。

○丁寧にかけているか、その姿勢の確認。更に体裁よく文が収められたか。

○用意した二枚目のハガキを使用して、指導教官へ投函すると仮定した作文。宛名書まで含め一枚暑中見舞状を完成させる。

書は人なり、文は人なり、という。達意の文こそもらってうれしい手紙である。限られた紙面を端的な言辞でまとめることの重要性。

決まり文句に終始しない。自分の言葉で表現する。季節感を大切にしたい。

○提出。次の時間に特徴のあるものを数枚選びコピーして配布。鑑賞・意見交換を行う。

講義

13週

△手紙の書式について その二▽

○書家・書道科卒業生・一般・本時受講生からこれまであった来信

の実物を見せる。

○試験の代わりに巻紙・筆文字による暑中見舞状投函を課題とする
(授業者岡村宛)。

○とくに巻紙に関し実例を示しながら説明。

手紙文化として伝世する中でもとりわけ古典的なもののように目され特別視されている書式を取り上げ、書に関する実用文化の幅のあり方を体験、手紙を筆で書くことを学生に印象深いものとして強く感じさせたい。

講義

14週

〈手紙の書式について その二〉

○夏期休業中に課した暑中見舞状に関し実物を展覧しながら感想を述べる。

○もろう側のよろこびを想像。

○電話やインターネット等との違い。

○心に残る手紙とは。

まとめ 手紙は実用品が芸術として昇華された一例。巧さの追及ばかりでなく、個性が加わればそれが見どころとなる。

〔教育実習期間を挟み〕

実技

15週

○実習に関する全体的な感想をまず問う。

○次に書写の授業を担当した学生に意見感想を求める。

○現場の生々しい体験・声に耳を傾ける。

○教育職に就く姿勢——とくに苦勞し大変であったこと、逆に校内でなければ味わえなかったうれしさ・よろこび・達成感を必ず忘れない。日誌にも明記。

初秋を迎え夏休みの思い出を半紙に揮毫する。なるべく四字、かなが入ってもよい。

○久しぶりの運筆であるため、基本事項を確認しながら展開する。
○手本のない学習となるが、机間指導により個々の問題に当る。
○のびやかに健康的に仕上がることを目標とする。

講義

16・17週

〈指導要領〉

小・中全般にわたり講義中触れることは難しいので、要望に応じまたその都度適宜部分を抽出して説明、理解を深める。

〈指導案について〉

○略案を書きまとめる。

次週から三人の学生に模擬授業を行わせることの予告。自分が実際にを行うと仮定して作成する。

内容

中学一年生を対象として「季節感」を素材に盛り込んだ書道の授業を行うことをテーマとする。課題とする語句は各人が選択。

○説明

○実技

○考え見る時間

○意見交換

○山場となる点

一般的なおよびその流れを組み立て、配布資料に基づきながら理解させる。

進度に応じ指導案執筆に二時間かける場合もある。

模擬授業者を決める。立候補が多い。

決定後、本番にいたる間一・二回個別指導を行う。

模擬授業

一

18週

一人四十分の持ち時間で二人が行う。

目標

○テーマが貫通しているか。

○何を伝え学ばせたかったのか。

○目標と評価との関連。

○展開を設け、まとめること。

○相手の気持ちの捉え方。

○既成品の組み立てではなく、手作りの、汗をかいた、体をはったことが伝わる姿勢。

○書くことが主眼だが、別の面からのアプローチをも工夫。

○範書の位置付けと効果を考える。

○声量・立ち位置の工夫。

○小まとめ——生徒役となった学生から受講後の感想を聞く。

○大まとめ——生徒役となった学生から受講後の感想を聞く。

模擬授業

二

19週

三人目の授業者が持ち時間五十分で行う。

まとめ——前時より多目に学生から受講後の感想を聞く。授業者から手応えを聞く。意見交換を重ねる。

ポイントを先述の目標に絞りながら内容を振り返る。

何回も聞くより自己でやってみる、相手に見て聞いてもらう、やってみることが一番である。労多くとも得るもの大きい。

〔模擬授業者を囲み反省会〕

〔模擬授業者を囲み反省会〕

実技

20週

小・中学校書写教科書より数課題コピーを配布し、手本として学習する。

教科書がどのような内容になっているのか把握する。

○形・配字・筆順・筆の運び方の説明。

○外形の原則・点画の組み合わせの原則、部分の組み合わせの原則、文字のバランスの取り方の原則。

○二字から四字へ。

出来れば楷書体から行書体まで学習したい。

行書体については別に時間を加える。

実技

21週

〈前時の学習の応用〉

基本事項を踏まえ、小・中学生向けの書写授業に用いる教材（配布を予定する手本・参考資料）の揮毫

○言語も自分で選ぶ。二〇四字。

○今までは手本を配ったが本時はそれがない。

○どれ位手のうちに感触が残っているか理解度を推しはかりながら学習する。

○二〇四字句を一枚清書するとともに、それを教材として用いる際の指導上の留意点・ポイントを別紙に鉛筆等で書きまとめる。

○提出

提出作の評価は授業者（岡村）が行うのではなく、学生同士が行う。自作を提出するとともに他者の作を一枚持ち帰り添削（筆記用具は自由）を行う。他者の作に批評を実際書き込むということは気を使うものである。その難しさの実際を体験することを通して、

○評価のあり方

○鑑賞眼を深める

○揮毫上、一般に難しいと思われる箇所

○自作の個性・長所・改善すべき点

右記のような点を意識し考えたい。

次回に授業者（岡村）に一度添削物を提出。通覧後、書いた本人に作品を返す。

○評価のあり方

○鑑賞眼を深める

○揮毫上、一般に難しいと思われる箇所

○自作の個性・長所・改善すべき点

右記のような点を意識し考えたい。

次回に授業者（岡村）に一度添削物を提出。通覧後、書いた本人に作品を返す。

○評価のあり方

○鑑賞眼を深める

○揮毫上、一般に難しいと思われる箇所

○自作の個性・長所・改善すべき点

右記のような点を意識し考えたい。

次回に授業者（岡村）に一度添削物を提出。通覧後、書いた本人に作品を返す。

○評価のあり方

漢字かなまじり文を適宜手本として配る。

目標

○読みやすさ、を考える。

○丁寧を書く。

その二

23週

便箋を用意させ、細ペンを用い手紙文を書く。

正しい書式の再確認。

その三

24週

これまでで学んだ小・中・高・大学校歌の中から一つ選びB4判(縦・横書自由)に体裁よくまとめる。

日頃口ずさむ歌詞に代えてもよい。

実技

25・26週

〈年賀状の制作〉

後世に伝えたい慣習上、手書文化として年賀状がある。

○賀状を出す意味。

○賀状を作る楽しさ・よろこび。

○賀状をもらう楽しさ・よろこび。

多様な賀状を実際に鑑賞し、実用として書が生きていることを確認する。

墨と筆ならではの妙味・書き味・香りを看得する。

課題

○宛名は筆で書く。

○本文に版画を一部用いる(手作業を体験する一環として)。

○本文は書が主人公にならなくてもよい。絵画的な内容・自分の専門性にひきよせたものでよい。

○個・独自性のはっきり打ち出されたものが一番よい。

○試験の代わりとして課すものであり、締切りは元旦必着とする。

これまで本授業で作成された賀状より特徴のあるものを参考資料

としてプリントし配布。

課題として捉えるのではなく、日頃世話になっている人への謝意と挨拶のため多く投函してほしい。

卒業後、社会人になってから時間・こころのゆとりを見出しながら年賀状を一枚ずつ書く習慣を身につけたい。

実践者として手作りの良さを周囲に宣伝することこそ、望まれる点である。

〔冬期休業〕

実技

27週

時間をかけて、到着した様々な年賀状を一同に並べ鑑賞する。

賀状を作り、もらい、鑑賞する楽しさを改めて確認する。学生は手に取って表裏熱心に見入ることが多く、感想が口々に漏れることが自然である。

新しい年を迎え、気分を自由に書表現する。

○半紙二〜四・五字。

○書体自由。

実技

28週

〈小筆を用いた学習 その一〉

いろは歌 ひらがなの練習。

漢字と比見た上でのひらがなの特徴。

○丸味が多い。

○やわらかく見える。

○すっきりとして見える——柳葉線。

実技

29週

〈小筆を用いた学習 その二〉

簡単な散らし書きを体験してみる。
手本・参考資料を配布する。

実技

30週

〈小筆を用いた学習 その三〉

新潟県にゆかりの短歌・俳句を素材として半紙にまとめる。

○本県出身の文化人。

○本県を舞台とする文学作品とは。

○新潟に居住して気付くこと。

○自然、観光。

○四季のうつろい。

○感受性を鋭敏にすること・出来る年齢。

一つのものを見てそれに「美」を感じるかどうかは、見る側の態度による。強制からではない。特別に用意された舞台でない、何気ない日常生活に美の価値感を楽しむことの重要性。

素材に感性を寄せる一方、実作の表現上では小筆に慣れることを大切とする。

最終講義

31週

学習内容を前・後期毎に、そして通年で振り返る。

○国語科として。

○理論。

○表現の範囲。

○言語に関するものとして。

○実用性。

○書美・芸術性。

○基本事項。

○個性とは。

八

最後に小筆を用い、受講しての感想を率直に半紙に綴る。授業者（岡村）はそれによって受講者の手応えをみる。次年度への反省点や方向性を考え、シラバスを組み立てる材料とする。

評価

どれ位前向きに取り組んだか。興味を抱くようになったか。この点につき毎回の講義中のやりとりや提出物、小テスト（漢字に関する内容）によって採点する。

出席率も考慮するが、概ねよい。出欠状況は学習態度と比例している。

以下、受講生の半分程の感想を提出されたまま列記する。

二年 学校教育

この一年間書道の授業をとってきましたが、この授業は、大変面白く、書道を好きになることができました。昔は字が上手ではないから嫌いだったのですが、今は頑張って書いた自分の字が大好きです。

あと、年賀状を、版画でつくったことが一番楽しかったです。

二年 国語科

私はこの講義を通して、書道を他方面から経験出来ました。手本をただまねるだけでなく、筆使いを少し変えて、個性を出すのも、書の楽しみということを知りました。

日常に書を取り入れることは、なかなか大変なことです。しかし、書は好きなのでまた取りたいと思います。

ありがとうございました。

四年 国語科

感想、いろいろ幅広く勉強することができてとてもためになる講

義でした。

夏に初めて行った展覧会で、書の奥深さや可能性を感じました。また機会があったら行ってみたいと思います。

抱負、私は文字を書くことは好きですが、筆を使うと思うような線が書けません。自分の思いどおりに書けなくてくやしいので、これから書道を続けていきたいと思っています。

感想

四年 家庭科

習字ではなく書道を学べて楽しかったです。

抱負

書道の世界にもっと親しんでみたいと思います。

そしてもっと字が綺麗になりたいのもう少し練習したいと思います。

この授業をうけて、私の今までの書道観が大きく変化したように思います。

小・中学校では形の美しさばかりが取り上げられ、書道教室に通っている子のみがヒーローでした。私を含め字の形の整っていない子は細々と作業する、という授業でした。

そんなこともあり、私はすっかり書道が嫌いになってしまいました。

しかし、この授業では形の美しさ以外のこと、すなわち書を通して個を表したり、書を日常生活の中で役立てたり、ということを学ぶことができました。

すべての学生がヒーローになれると思います。

私が将来先生になったときは、すべての子どもがヒーローになれるような書道の時間を作りたいです。

この授業を通して一番の収穫は書道が好きになったこと。

三年 国語科

来年、一年間海外で過ごす予定です。日本語教育のさかんな国なので、ぜひ今までの経験を活かし書道を通じた国際交流が出来たらいいなと考えています。こんな感じで、何らかの形で一生書道は続けていくつもりです。

四年 人文学部

書道を習い始めて久しいですが今年一年間は本当に書道を楽しめたと思います。講義は教育するという視点からのものが色濃く、そのため新発見も多く楽しい、ためになった一年でした。

二年 社会科

前期から一年間、先生の講義を受けました。週に一回筆を持って字を書くというのは、久しぶりだったので最初の頃は、「筆を使う」ということに慣れるのが大変でした。この講義では、忘れかけていた習字の基本的なことを再度勉強することができてよかったと思います。又、前期に書展を見に行ったことは、とても良い経験になりました。

私は、社会科が専攻なので教員になっても書道を担当する時間は少ないと思いますが、もし教える立場になったら、この授業で学んだことをもとにがんばりたいと思います。

二年 社会科

この講義をとった感想と今後の抱負

この講義は前期に引き続いてとったのですが、後期は人数が多く、また講義の内容自体も実際の授業を想定したものや、仮名をやったりと、前期とは異なっていて楽しかった。

今後、講義がなくなると、書道に接する機会が減りそうだが、たまには書道をする機会をもとうと思う。

授業について

三年 国語科

私は今まで書道とは、よりお手本に近いものが評価されるという、個性がなく、おもしろくないものだと思っていた。しかし、この授業では手本はほとんど提示されず、自由に表現させてもらい、とても楽しく書くことができた。また、先生方の展覧会も個性的でおもしろかった。この授業のおかげで、書道に対する見方がかわり、興味を持つことができたと思う。

これからの抱負

年賀状とかも筆で書けたらいいな、と思う。全部出席して色紙をほしかったです。

授業を通しての感想、来年度の抱負

二年 英語科

大学での授業は講義形式のものばかりで、生徒と教授が同じ高さで学ぶ授業には今まで出会っていなかったもので、楽しさや学んでいることを実感できる、私にとって新鮮な授業でした。前期、後期を通じて、どんな活動をしてきたか鮮明に覚えていいるし、(新潟祭のポスター作成やのし紙、暑中見舞など)教える立場に立つて考えると、生徒が授業内容を覚えていくくれるのはうれしいし、それこそ目指すべき授業なのだと思います。生徒参加、生徒自身の活動を重視した授業ができる教員になれるよう、教育法の講義を大切にしたいと思います。

—感想—

三年 学校教育学

私は前期と後期の一年間この講義を受けました、私は習字が苦手なので、最初の頃は苦痛だったのですが、先生の授業は、堅苦しい書道の授業とは違っており、鑑賞の時間があったり、字のイメージ

を大切にして字を書いたりして、すごく楽しみながら書くことができました。そこで、書道に対するいいイメージがなくなりました。ありがとうございました。

—これからの抱負—

もし、私が小学校の先生になり、書道を教えることがあったら、私のように、書道がきらいな子がいると思うので、そういう子たちにも楽しんでもらえるような授業をしたいと思います。

三年 国語科

この一年で、嫌いだった書道が、少し好きになりました。私は、雑な性格なので、それが書にも出てしまい、今までさんざん下手と言われてきて、嫌いでした。でも、この授業はあまり上手・下手を言わず、表現中心だったので、こんな私でも、とても楽しいと思えました。

これからは、せっかく知った書表現の楽しさを忘れず、かつ、美しく書けるようになります。なかなか、手紙やのしを書こうにも、やはり上手できれいな方が相手の気持ちがいいと思うので。

あと、私は書き順がバラバラなのでちゃんとしていきたいです。一年間ありがとうございました。

三年 国語科

授業の感想

今までに受けてきた書道の授業はお手本を見て、上手に書く、というものでした。しかし、この授業はお手本なしで自分の書きたいように書いたりして、すごく新鮮でした。一つの字に対して、一人一人が自分でイメージを思い浮かべて書いていると、それぞれの字が個性的で、見るのが楽しかったです。

また、半紙だけでなく、ハガキや便せんに書いたり、新潟まつりのポスター書きなども、とても楽しく取り組むことができました。

これからの抱負

この授業で手紙、暑中見舞い、年賀状を書くということをしてから、書道がちょっと身辺なものになったような気がしています。だから、これからは書道を特別な物とか、堅苦しいものと考えずに、普段の生活に役立てていけたらなあと思っています。

一、授業の感想

文字で感情を表現したり、年賀状を制作したり、模擬授業を見たりと、充実した後期のこの授業でした。何といっても今日のテスト（部首名・書き順）が難しかったです。答えを聞けば知っているのに忘れていたものがほとんどでした。毎回話も作業も楽しかったもので、もしかしたらまた聴講するかもしれないので、その時はよろしくお願いします。

二、これからの抱負

私が授業をするとしたら、皆が思いっきり書くことを大切にしたいです。自分もそれを大切にしていきたいです。

授業の感想

三年 国語科

私はこれまで習字の授業というのは大嫌いでした。お手本をもらってそれを真似て書く、というなんともつまらない授業が嫌いで、なんのために習字の時間があるのか、不思議でなりませんでした。

しかし、この授業を一年間受けてみて、なんだかわかったような気がします。漢字の書き順やへんやつくりの名前、漢字の成り立ちなどに興味をもつことはもちろん、墨で文字を書くことは、一つの自己表現であるということも学びました。小・中と通して学べなかったことを、この授業で学びました。

将来、教員になったとき、私のように習字が嫌いだ、という子ども

もたちに、この書道の楽しさを伝えたいと思います。

一年間ありがとうございました。

〈感想〉

二年 英語科

前期、後期と書道をしてきたわけですが、ただ字を書くというのではなく展覧会に行ったり、祭りのポスターを作ったりと講義ばかりの大学の授業とは違ってとても楽しい時間を送りました。一年間ありがとうございました。

〈抱負〉

たとえ、授業が終わっても、社会人となると文字の上手さと語彙力が必要になってくるので精進していきたいと思っています。

二年 国語科

自分なりの表現法を重視した授業内容は私にとって驚きであると共に新鮮でした。書道は模倣ではなく自分で作り上げていくものなのかもしれないと感じました。授業も終わり、筆を持つ機会は減ると思いますが、年賀状などは筆で書いたり、日本人の心を忘れぬように、書道と接していきたいと思っています。

二年 国語科

この授業は、後期に受けた授業の中で一番楽しかったです。自分が小学生か中学生に戻った気分を実技を学ぶことができたし、また、自分が教師になったら、どういう点に注意して生徒に教えようかということを考えることができました。今後、教師になったら、手書きのよさを生徒に教えてあげたいです。また、年賀状や暑中見舞など、今までペン書きしていたものを、筆で書いてみようと思います。筆を使う機会が減るのはさみしいので、自分で使うよう心がけます。

二年 国語科

私は幼い頃から書道を習いたいと思っていましたが、そのような機会を持てませんでした。大学でその機会を得ることができ、大変うれしく思います。この講義におきましては、実技のみに限らず、漢字の筆順や部首、つくりなどの講義もあり、国語科として大変興味深く聴講することができました。将来は、小学校の教師になりたいと思っていますので、より一層の上達を図りたいと思います。

二年 国語科

この授業では実技に加えて漢字のおもしろさも再確認することができました。模擬授業の機会も与えていただき勉強になりました。授業者の楽しさも味わえました。これからは小筆の勉強もして上達したいです。年賀状も筆で頑張ってみたいです。ありがとうございます。

二年 国語科

この授業を受けてから、以前よりも、自分の「字」を見直す機会が増えたように思います。これまで何気なく書いていた自分の字には、意外にもくせが多いことに気付かされ、驚いています。私のまわりには、とても上手ですてきな字を書く友人がいるので、私はいつも比べてしまうと共に羨ましいな、私も上手になりたい!と思う日々です。筆で書く字は勿論のこと、普段使いの字も少しずつ磨きをかけていこうと思います。今後はまた、相田みつをさんのような温かさと素朴な雰囲気をもった書にも挑戦してみたいと思っています。

二年 英語科

こういう文化的な授業は大学ではなかなか受けられないので、一年通して週一回のこの習字の授業に参加できたことは貴重だったと

一一

思うし、生徒自身に授業をさせてみたり年賀状の作成の際に習字だけでなく版画も行わせたりと、先生の様々な授業への工夫がちらばめており面白かったです。個人的には前期の後半で、書の展覧会に足を運び、初めて見る芸術としての書を目の当たりにし衝撃的だったことが心に残っています。一年間有難うございました。抱負といってもそんなに立派なものではないのですが、自分の好きなことというものを大切にしていきたいです。

三年 教育学科

一年間、この書道の講義を受けて書道が好きになったような気がします。準備をすることさえ、面倒臭いと感じていたが、そうではなくなりました。特に模擬授業は大変だったけど楽しかったです。抱負は、版画を続けていきたいです。また、小学校の先生になった時にこの講義で学んだ楽しさを伝えていきたいです。

二年 英語科

前期は別の先生の講義をとったので、後期の「個性」を重視したこの授業は、不思議な感じがしました。来年度は、自分の好きな専門科目に、意欲と責任を持って取り組んでいこうと思っています。半年間ありがとうございました。

四年 国語科

私は字が下手なので、昔から書道が嫌いでしたが、この授業では、年賀状などの実用的な内容が多かったので、楽しんで参加することができました。将来教壇に立った時、授業でやった事をやれば子供も楽しめると思います。書道という文字をきれいに書くことが優先されるというイメージがありますが、むしろ下手でも書くことが楽しいと感じられる事の方が重要だと学びました。卒業後も書道の習慣を持ち、教師になったら、この授業で学んだ事を活かしたいと思

います。

二年 学校教育

この授業では書道の実用性を学ぶことができました。この実用性を活かして、今後とも書道を自分なりに続けていきたいと思っています。

二年 国語科

この授業を通して、書道はうまく書くことだけが大切なのではなく、個性あふれる字もいい字なのだと分かりました。もっと多くの人がそのことを知って、より気軽に書道を楽しんでほしいと思います。

四年 音楽科

おとしこの授業を授けたが、今回とは印象がだいぶ違っていった。前はもう少し創作っぽいことをしていたような……。しかし、書き順や部首名をしつかりやったので、字に対して新たに眼を向けることが出来たと思う。このようなことは疎遠だったので、自分がこんなにも知らない、忘れていたということがほっとく無くなると思うが、これから落ち着いて字を書くということがほとんど無くなると思うが、せめて自分の名前を書く時には、しつかり落ち着いて書くと思う。やっぱり字はいくらか人格の印象を人に与えるものだと思う。

二年 学校教育

習字は小学校の時から習っていたこともありとても好きです。この授業では前に、楽しい感じや寂しい感じで文字を書くということをやリ、とても新鮮に感じられ更に好きになりました。今の時代、文字はパソコンで打つことが多くなってしまうましたが、手書き、特に墨を使って書く良さを忘れずと身近に習字を取り入れていきたいです。

二年 国語科

私は、この授業で嫌いだった習字が少し好きになりました。ただ字を墨で書くだけでなく、文字に感情を込めたり、自由に表現することや字を書く楽しさを得ました。これからのこの気持ちを忘れなようにしたいです。ありがとうございました。

二年 国語科

一年間書道をやってきて字を丁寧に、いかに表現するか、など今日はどういうイメージで書くのかと試行錯誤するのが楽しかったです。小学生の頃から習ったりしましたが、それはそれで全く実用的に使わなかったもので、これから、もっと筆を身近にしてあて名を書いたり、自分の表現方法の一つとしたいです。個人的に芸術性のある字などいつか、書いてみたいです。

三 まとめ

大学講義に関し今後外部評価が増えるのであろうが、その内容につき最も判りやすく反応を示すのは学生の視点だと思っている。

書く

調べる

みる・鑑賞する

といった要素の存在を知り、学生はそれに興味を示している。

「書」はとかく「古臭い」といった印象がつきまとう。また、巧拙の話題が中心となり過ぎる余り、苦手意識を従来教育の中で抱いているものにとつて、敬遠の対象となりやすい。さらに、「手本」が存在し、「手本」通りに書くことにかた苦しさを覚えることもしばしばである。道具の準備の点でも面倒に思われがちである。要は、ただ書くことしかイメージがないものとみられている。

実技と講義とがいつも表裏一体となった概容である。講義は実技を補完するものだが、

○手紙の書式

○熨斗袋等儀礼上のマナー

等実用的なテーマを学生は多く望んでいる。

実技においては、きれいな文字を書けるようになりたい、と念じる学生はもちろん多い。しかしながら現実としては、講義の期間位では、それ程短期間に技術が向上することは余り望めない。コツ・ポイントを掴むことと、それ以上に要は、心構えと姿勢に関し段階を踏まえ論じることが肝要であろう。

様々なメニューを用意しながら、あとはどの辺りに学生がついてくるものか、今後模索が続くが、

○書は用の美である

○興味の喚起と自発性

○手本のあり方と個性の発露

を指導理念と捉えておきたい。これまでの「書道講義および実習Ⅰ・Ⅱ」受講生の態度から感得したものの分析は、次に社会人教育の場面においても生かされる。続いて論述したい。



模擬授業よりの
一コマ・示範

鑑賞

